

# 現代アメリカ・マイノリティ詩人の自在性

— Sherman Alexie と Cathy Park Hong —

湊 圭 史

## 1. はじめに

1993年の Toni Morrison のノーベル文学賞受賞に象徴されるように、アメリカ小説の世界ではヨーロッパ系以外のいわゆるマイノリティ作家たちがアメリカ合衆国を代表するようになって、すでに少なくとも四半世紀が経過している。遅れ気味であった詩の世界でも、2000年代になって急速にマイノリティのマジョリティ化が進んできている。1950～60年代に活躍した大詩人たち—ニューヨーク派、ブラック・マウンテン派、ビート・ジェネレーションと呼ばれるような、アメリカ詩の独自性を多様なかたちで追及し、新しい英語詩の風景を作り出した世代—が徐々に退場していつているというアメリカ詩愛好者にとっては寂しい事情もある。だが、そうした現代のアメリカ詩の風景も、特にマイノリティたちの自由な創作に注目してみると、かつてと変わらないほどの刺激を与えてくれる。

ここでは、先住民系の人気作家でもある Sherman Alexie と、韓国系の Cathy Park Hong の二人のマイノリティ系詩人の詩をとりあげ、そこに示される実験的な言語表現と、歴史に対する自由な姿勢に注目する。かつて、マイノリティ文学はマジョリティが支配する文化的風景に対して異議申し立てを行うものだという固定観念があった。マイノリティがそもそもその定義として、数的あるいは政治・経済的に不利な状況に立たされているという意

味を含んでいるところからすれば、この異議申し立てという特質は当然付随するものであり、現在でも状況は変わらない。ただし、Alexie や Hong、その他の積極的な活動を行うマイノリティ詩人の作品を読んで驚かされるのは、むしろマジョリティが捉われている固定的観念—歴史観や社会通念など—から独立した視点をもつことによって、マジョリティにとっても刺激的な表現を生み出していることである。21世紀に入ってさらに加速してきた価値観の多様化と、その逆にテクノロジーを介したグローバリゼーションによる一体化の両面について、これらのマイノリティ系アメリカ詩人の試みは他に代えがたい示唆を与えてくれる。

## 2. ポップな時代の喪の儀式—— Sherman Alexie の詩

アメリカで毎年出版されている詩の人気アンソロジーに、The Best American Poetry (以下 BAP) シリーズがある。1988年版を皮切りに、各年度、前年にアメリカとカナダで発表された詩から75篇を選び掲載しており、現在の詩の多様な現状の全貌が分かるとまでは言えないが、どういう詩が広く受け入れられているかについての一定の指標として参考になる<sup>1</sup>。その BAP シリーズの2011年から2014年版に、Sherman Alexie の詩が連続して掲載されている (2015年度版 BAP は Alexie が編者である)<sup>2</sup>。

詩人としての Alexie は日本ではまだ認知度が低い。しかし詩人としても最初期から活動しており、また高い評価を受けてきた (作家のオフィシャル・ウェブサイトの “Biography” では、“Sherman Alexie is a poet, short story writer, novelist, and performer.” と「詩人」が肩書の始めに置かれている)。日本ではアメリカ (あるいは他の海外地域) で現在書かれつつある詩一般の紹介が進んでいないことを考えても、詩人 Alexie に対する注目は極めて低い。しかし実際に作品を読んでみると、社会性、実験性、エンターテインメント性を高度に兼ね備えた詩風は、ネイティブ・アメリカンの苦境を中心テーマとしながらポップな要素を散りばめ、Alexie の散文作品

とも共通する魅力をもっている。BAP シリーズの2012年版から3年続けて掲載された詩群はとりわけ目を引く快作である。ここではこの3作を抄訳<sup>3</sup>と共に紹介し、その魅力を分析してみる。

BAP シリーズ2012年度版掲載の「末期的ノスタルジア」“Terminal Nostalgia”は、翌2013年に出版された BAP シリーズ25年記念の精選版(Robert Pinsky 編)にも選ばれている。「気候だってそう(同じ)だった」というリフレインがネイティヴ・アメリカン伝統の口承詩のスタイルを思わせる作品である。最初の6連を引用してみる。

#### 末期的ノスタルジア

俺の若い時の音楽はあなたの音楽よりも  
ずーっと良かった。気候だってそうだった。

コロンブスが来る前、鷹の羽根は鷹から  
自然に離れて俺たちに与えられた。気候だって同じだった。

戦争のときには国が一丸となって  
悪と戦った。気候だって同じだった。

コロンブスが来る前、鷹の羽は  
鷹よりも大きかった。気候だってそうだった。

野球の試合はかならずダブルヘッダーだった。  
ミッキー・マントルは素面だった。気候だってそうだった。

アダムとイヴ以前には、アイリッシュセッターが  
神様の遊び相手だった。気候だって同じだった。

#### Terminal Nostalgia

The music of my youth was much better  
Than the music of yours. So was the weather.

Before Columbus came, eagle feathers  
Detached themselves for us. So did the weather.

During war, the country fought together  
Against all evil. So did the weather.

Before Columbus came, eagle feathers  
Were larger than eagles. So was the weather.

Every ball game was a double-header.  
Mickey Mantle was sober. So was the weather.

Before Adam and Eve, an Irish Setter  
Played fetch with God. So did weather. (Doty 1-2)

この調子で2行ずつの連が15個続いていく。タイトルにあるように過去の古き良き時代へのノスタルジアがテーマだが、出てくる過去というのは、アメリカ大陸へのヨーロッパ人入植が行われる前のネイティブ・アメリカンの生活・神話であったり、1950～60年代のいわゆる「古き良きアメリカ」であったり、さらには「アダムとイヴ以前」だったりする。Alexie 小説のファンにとってはいかにもこの書き手らしいと嬉しくなるごた混ぜのポップさだが、読み進めていくと最後には、現代という時代において過去を正当に想起することの難しさが実感できる。ここでの「ノスタルジア」とは、「末期的」な一種の病気なのだ。現代人の視点から先住民文化を静止した過去に押し込めようとしがちな私たちへの強烈な皮肉にもなっている<sup>4</sup>。

BAP 2013年度版に掲載されているのは、「厚皮類」“Pachyderm”<sup>5</sup>である。詩は1行ずつ番号をふられた箇条書きで書かれている<sup>6</sup>。

#### 厚皮類

1. シェルドンは、自分は象なのだと決めた。

2. どこへ行くにも、灰色のTシャツと灰色のスウェットパンツ、灰色のバスケットシューズを履いた。
  3. 真鍮のトランペットを自分で白に塗って持ち歩いた。
  4. そのトランペットを牙として使うこともあった。
  5. その後でもう一方の牙としても使うのだった。
- […]
10. ある時、シェルドンはトヨタ・カムリに頭突きを思いっきり食らわせてノックアウトされたことがあった。
  11. そのカムリを運転していたのはシェルドンの母アグネスだった。
  12. アグネスは自分が象だと思ったことはなかったし、象の母親だと思ったこともなかった。
  13. それにシェルドンがカムリのボンネットの上でのびてしまうまでは、シェルドンが自分が象だと本気で信じているとは思っていなかった。
- […]
23. シェルドンの双子の兄は最初のイラク戦争で死んだ。
  24. 1991年のことだった。
  25. 兄の名前はピートだった。
  26. シェルドンとピートの両親は双子に韻を踏む名前をつけるたぐいの親ではなかった。
  27. イラクで、即席爆撃装置がピートの脚、性器、肋骨、背骨を粉々にした。
  28. シェルドンは従軍することはなかった、右目が見えなかったからだ。
  29. 1980年、二人が8歳だったときに、木の枝でチャンバラごっこをしていて、ピートが誤ってシェルドンの目を突いてしまったのだ。
  30. 子供の頃、シェルドンとピートはよく戦争ごっこをして遊んだ。

### Pachyderm

1. Sheldon decided he was an elephant.
  2. Everywhere he went, he wore a gray T-shirt, gray sweat pants, and gray basketball shoes.
  3. He also carried a brass trumpet that he'd painted white.
  4. Sometimes he used that trumpet as a tusk.
  5. Then he'd use it as the other tusk.
- […]
10. Once, Sheldon head-butted a Toyota Camry so hard that

he knocked himself out.

11. Sheldon's mother, Agnes, was driving that Camry.
  12. Agnes did not believe she was an elephant nor did she believe she was the mother of an elephant.
  13. And Agnes didn't believe that Sheldon fully believed he was an elephant until he knocked himself out on the hood of the Camry.
- [...]
23. Sheldon's twin brother died in the first Iraq War.
  24. 1991.
  25. His name was Pete.
  26. Sheldon and Pete's parents were not the kind to give their twins names that rhymed.
  27. In Iraq, an Improvised Explosive Device had pulverized Pete's legs, genitals, rib cage, and spine.
  28. Sheldon could not serve in the military because he was blind in his right eye.
  29. In 1980, when they were eight, and sword fighting with tree branches, Pete had accidentally stabbed Sheldon in the eye.
  30. When they were children, Sheldon and Pete often played war. (Duhamel 3-8)

この調子で101番まで続いて、中編サイズの小説にもなりそうな内容が語られていく。Sheldon たち一家はリザベーション（先住民居留区）に住むネイティヴ・アメリカンで、兄の Pete はイラク戦争で戦死、父の Arnold もベトナム戦争で下半身不随である<sup>7</sup>。作品の軸となる Sheldon の「自分は象だ」という妄想は兄 Pete の死に対する心理的防衛反応であろう（“Pachyderm”には「鈍感な人」という意味もある）。植民地主義・帝国主義による支配に対する強烈な怒りを含んだ詩だが、番号つきの一行を並べたスタイルのせいか、語り口は軽く感じられる。それにつられて読み進むごとに、アメリカ合衆国に命をかけて貢献しても二級市民として扱われるネイ

ティヴ・アメリカンの絶望が読者の心にも沁み込んでいく。

BAP2014年度版に掲載の「ソネット、プライドをもって」“Sonnet, with Pride”は、イラク戦争時の米軍による爆撃の際にバグダッドの動物園から逃げ出したライオンたちに思いを馳せる詩である(タイトルの“pride”は「プライド」としたが、詩の中では「(ライオンなどの) 群れ」を指す語として使われ、ダブルミーニングになっている)。

ソネット、プライドをもって

ブライアン・K・ヴォーン／ニコ・ヘンリション著「バグダッドの  
プライド」にインスパイアされて

1. 2003年、イラク戦争の最中、アメリカ軍の空爆の際にバグダッド動物園から一群のライオンが逃げ出した。2. 混乱し、負傷し、予期もしない自由を与えられて、ライオンたちは食べ物と安全を求めて通りをうろつき回った。3. 少しの間だけでもいいから、自分がバグダッドに住むイラク人だと想像してみしてほしい。アメリカ軍の爆撃機が金属の翼竜みたいに頭上で吠える中を、あなたは走って避難しているところだ。あなたが走って避難している隣で、同じイラク市民が武器を手に怒り狂って、ライフルやロケットランチャーや迫撃砲をぶっ放している。あなたは安全な場所を求めて走っていて、周りではどンドン人間が死んでいく。戦争だ、戦争、戦争。そこであなたが角を曲がると、あなたに向かってくる狂ったライオンの群れが見える。4. 次に、自分は狩りに出たことでもないライオンなのだと想像してほしい。今まで檻の外を歩いたことさえなかったのだ。甘やかされ、餌を与えられてずっと生きてきた。なのに今、あなたの世界は辺り一面で爆発を繰り返している。戦争だ、戦争、戦争。そこであなたが角を曲がると、あなたに向かってくる気が狂った戦車の群れが見える。[…]

Sonnet, with Pride

Inspired by *Pride of Baghdad* by Brian K. Vaughan & Niko  
Henrichon

1. In 2003, during the Iraq War, a pride of lions escaped from the Baghdad Zoo during an American bombing raid. 2. Confused, injured, unexpectedly free, the lions roamed the

streets searching for food and safety. 3. For just a moment, imagine yourself as an Iraqi living in Baghdad. You are running for cover as the U.S. bombers, like metal pterodactyls, roar overhead. You are running for cover as some of your fellow citizens, armed and angry, fire rifles, rocket launchers and mortars into the sky. You are running for cover as people are dying all around you. It's war, war, war. And then you turn a corner and see a pride of freaking lions advancing on you. 4. Now, imagine yourself as a lion that has never been on a hunt. That has never walked outside of a cage. That has been coddled and fed all of its life. And now your world is exploding all around you. It's war, war, war. And then you turn a corner and see a pride of freaking tanks advancing on you. [...] (Hayes 1-2)

タイトルに「ソネット」とあるが、ソネットは英語詩の定型で14行、1行は10シラブルと決まっている。一応1～14と番号はふってあるが、この詩を「ソネット」と呼ぶのは従来の詩に対するおふざけも含んだ、現代の世界を詩はいかに捉えることができるのかという Alexie の挑発であろう。

以上の3篇に読み取れるテーマとして、過去をいかに捉えるか、特に死者をどのように思いに残すかという問いがある (*Reservation Blues* (1995) などの Alexie の小説作品にも共通のテーマである)。Alexie の現代の社会、文化をふんだんに盛り込んだスタイルは、このようなシリアスなテーマでさえも、読者の警戒を解いて、読ませてしまう。この詩人の「読んで面白い」作品は、ネイティブ・アメリカン社会、さらにはアメリカ合衆国という枠組みにさえ限定されない視野で、私たちは死者をどう扱うべきなのか、言い換えれば「喪の儀式」が現代においてどのように可能なのかを問いかけ、読者を巻き込んでいくのだ。



### 3. Cathy Park Hong 著 *Engine Empire: Poems*

Cathy Park Hong は1976年ロサンゼルス生まれの韓国系二世アメリカ詩人であり、ここでとりあげる *Engine Empire: Poems* (2012) は彼女の第3詩集である。初の詩集 *Translating Mo'um* (2002) では言語の問題を軸に韓国系の出自をテーマとしていたが、第2詩集 *Dance Dance Revolution: Poems* (2008) で仮想世界を設定して、連作によって物語をゆるやかに紡いでいくスタイルを生み出し、*Engine Empire* においてもその手法を踏襲している。使われる詩形はソネットから散文詩体、音遊びの詩まで幅広い。Hong の詩に読むことができるのは、マイノリティが抑圧されたアイデンティティを主張する、といった時代をとうに後にして、マジョリティが束縛されている世界観から自由な視点をもって、詩というジャンルをまったく新しい乗り物のように自在に乗りこなす、まさに新時代の表現である。

*Engine Empire* では三部構成で、虚構世界の過去・現在・未来が現実の歴史と交錯するように描かれていく。第一部“BALLAD OF OUR JIM”は西部劇調の設定で、19世紀アメリカ合衆国のフロンティアを移動していく一人称複数の「俺たち」の視点で語られる。冒頭の詩の始めを引いてみる。

The whole country is in a duel and we want no part of it.  
 They see us ride, they say  
 :all you men going the wrong di-rection.  
 :We're getting to California. We ain't got time to enlist. (19)

国全体が決闘に入っているが、俺たちは関わるつもりはない。  
 俺たちが馬で過ぎるのを見て、あいつらは言う  
 ーお前らみんな方向が間違ってるぞ。  
 ー俺らはカリフォルニアに行くのさ。志願する暇なんてないね。

最後にゴールドラッシュで突然できたらしい町 (“the boomtowns of

precious ore”)に言及されるように、19世紀中盤から後半のアメリカの西部が舞台である。登場人物たちが実際何者なのかははっきりと書かれていないが、歴史において忘却されていくような普通の意味ではとるに足らない存在であることは読み取れる。詩集タイトルの語“empire”という語がこの詩の中では、「強大な帝国が興隆する。」(“A mighty empire arises.” (25))、「俺たちは帝国が興隆するのを見る。」(“We see the empire rising.” (25))と現れるが、語り手たちはアメリカ合衆国が強大な国になっていく歴史のうねりを、遠くから眺めているだけである。

第一部の中心人物である Jim は、語り手たちのグループがある町で拉致して仲間にしてしまったアフリカ系 - ヨーロッパ系混血の若者である。半端ものの語り手たちの中でもさらにアウトサイダーのこの Jim (Herman Melville の *Moby Dick* (1851) に登場する Pip や Mark Twain の *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884) の Jim を思い起こさせる) が、やがて、集団を代表する歌い手および暴力的行為の担い手として、徐々に全体の代表となっていく。世界の混沌を一手に引き受けるようなトリックスターとしての Jim、ここに第一部の核がある。

下記は“Ballad in I”と題された詩からの抜粋で、ここでは「私たち」と Jim の旅の結末は言語的な実験と重ね合わせられることで表現されていく。

His mind's still spiting, knifing with skill,  
his victimizing intrinsic within his mind,  
grinding within his skin,  
Jim sings: I'm tiring, I'm tiring. (36)

この詩はリポグラム (“lipogram”、あるいは “univocal lipogram”) という、母音を担う文字を一つだけ (ここでは “i”) に限定した形式で書かれている (訳すと大きく興が殺がれるスタイルなので、ここでは日本語訳は省略する)。一つ前の詩では、手に負えなくなった Jim を「俺」たちが殺そうとして失

敗している。この詩からは決定的に Jim が主人公となり、「俺たち」や「俺」は消えてしまう。私 “I” は Jim という世界の混沌と身一つで対峙する存在へと吸収されてしまった。リプログラム形式はここでは、言葉遊びによっていわゆる「異化」（表現された内容がフィクションであることの強調）を起こしながら、同時に世界と人間主体の関係のダイナミズムを表現するという多面的役割を果たしている。

第二部 “SHANGDU, MY ARTFUL BOOMTOWN!” では、架空の中国の新興都市 Shangdu<sup>8</sup> が舞台となる。この部でのハイライトは、散文詩連作 “Adventures in Shangdu” で、急速な工業化によっていびつな都市化が進む中国の現在の状況が誇張したかたちで描かれる。クレーン作業労働者たちがストライキの際に示威的にクレーンで吊りあげた車が、彼らが逃げた後でも街にそのまま釣り下がって錆びついている光景 (“Of the World’s Largest Multilevel Parking Garage” (51)) などは実際にもあり得そうだと思うされる。

“THE WORLD CLOUD” と題された第三部では、詩集タイトルの “engine” は工業的な機械である発動機からインターネットのサーチ・エンジンへと切り替わる。第一部が過去、第二部が現在をとり上げていると読むと、この第三部は未来を描いていると考えるのが自然だが、寓意として読むなら、現在の情報化社会を書いていると解釈することもできる。第一部からの暴力や資本主義の拡大、第二部からの監視社会のテーマが新たな状況で照らしだされて、寓話とリアリズムのどちらにも分類しきれない独特の世界を作り出している。

決定的に仮想未来を描いているのは、最後にエピソード的に置かれた詩 “Fable of the Last Untouched Town” である。最後の箇所を引く。

労働者のひとりが実際に氷を飲み込んでしまって、  
そのせいで幻覚を見てしまい、別の言語でわけのわからないことを喋り

たてた。  
彼は即刻消されてしまった。  
私たちはマスクをつけるよう命じられた。

ある日、私は少しだけ盗むことにした。  
一粒だけポケットに入れた。  
私の小屋で雪は青くぼおっと光った。  
私の小さなランプ。  
それから何故だか分からないが、私はそれを飲み込んでしまった。

それで見たのがこれなのだ。

One laborer accidentally swallowed ice  
and it caused him to hallucinate, blither in another language.  
He was immediately exterminated.  
We were forced to wear masks.

One day, I decided to steal some.  
I pocketed one grain.  
The snow glowed bluely in my hovel.  
My little lamp.  
Then one night I don't know why I swallowed it.

And this is what I saw.

最後の行の「これ」とは、*Engine Empire* に収められた詩群と見るのがいちばん自然であろう。詩集のエピグラフでは James Joyce の傑作短編集 *The Dubliners* (1914) の結びの短編 “The Dead” の結末を引いて「雪」のテーマが予告されていた。「雪」は第三部からちらほらと登場し、この詩では「帝国」が管理する情報のメタファーとして提示されている。禁じられたこの「雪」を個人が服用することは、危険な「詩」を引き寄せるのだ。

先ほど言及した *Engine Empire* のエピグラフは次のようなものである。

He heard the snow falling faintly through the universe  
and faintly falling, like the descent of their last end,  
upon all the living and the dead.

— James Joyce

実は Joyce による原文では、“The Dead”の最後の文は以下のようになっている。

His soul swooned softly as he heard the snow falling faintly through the universe and faintly falling, like the descent of their last end, upon all the living and the dead.

宇宙を通過するかすかに降ってくる雪の音、すべての生者と死者のうえに、彼らの最後の瞬間が降りてくるようにかすかに降ってくる雪の音を聞きながら、彼の魂はそっと意識を失った。

Hong は最初の部分（日本語では最後の「～ながら、彼の魂はそっと意識を失った。」の部分）を消して用いているのである。“The Dead”でダブリンに降る雪は、アイルランドの現状についての作者 Joyce の悲観、「麻痺」“paralysis”状態に陥った祖国を示すと解釈されるのが通例だ。対して、Hong の *Engine Empire* の「雪」は意識を眠らせもすれば、詩的覚醒を促す劇薬でもあるらしい。

言葉でできている以上、詩を書き、読むことは、現実世界から距離をとることである。同時に、言葉も世界の内部にあり、特に情報化社会においては、現実を駆動する「エンジン」として機能している。詩的行為とは世界、現実から言葉という「雪」を盗んで飲んでみることであろう。そのことで、私たちの意識は、言葉（虚構）と現実の境界線上を漂うことになる。こうした危うい領域を描き出しながら Hong の言葉に緩みがまったく感じられないのは、詩人がこうした詩のありようにどこまでも醒めているからだと思われる。

#### 4. 終わりに

マイノリティという立場にあることは、マジョリティが作り出した社会に順応することを否応なく求められることである。と同時に、マイノリティは自らのコミュニティや伝統、たどってきた歴史の経緯から、独自の価値観や視点をもつことになる。「すべての人間は平等である」(“All men are created equal”)と憲法に書かれながら、人種・民族の間で生じる格差を解消することの困難に常に直面してきたアメリカ合衆国において、マイノリティがもつこの二重意識がもたらす困難と可能性を指摘したのは、20世紀前半を代表するアフリカ系知識人 W. B. E. DuBois であった<sup>9</sup>。

Alexie や Hong の作品にみられるように、こうした二重意識は現代の詩作において、固定された世界観から自由に言語を組み立て、虚構と現実を自在に行き来することで、エンターテインメント性と社会批評性をもち合わせた魅力的な世界を生み出している。Alexie が編者を務めた BAP シリーズの2015年版では、通常編者による“Introduction”として短いエッセイが付されるところに、Alexie が様々な場所に残したコメントからの引用と、詩が一つ載せられている。コメントの一つには、以下のような箇所がある。

“I suppose, as an Indian living in the U.S., I’m used to crossing real and imaginary boundaries, and have, in fact, enjoyed a richer and crazier and fearfully crossed all sorts of those barriers. I guess I approach my poetry the same way.”  
(Alexie xxi-xxii).

このような姿勢によるマイノリティ詩人の自在な越境を詩の中に味わうことは、今日のアメリカ詩の楽しみの重要な要素であると思われる。

\* 本稿は詩誌『Lyric Jungle』19号(2015)と20号(2016)に「英語詩

最新事情」として発表した原稿をまとめ、改稿したものである。

### Notes

- 1 各年度、シリーズ編者 David Lehman が選出した著名詩人が編者を務めることになっており、編者ごとの傾向の違いもあって興味深い。
- 2 Alexie はネイティブ・アメリカン系としては日本でも最も広く知られた作家だろう。小説家 Alexie 初期の代表作 *Reservation Blues* (1995) や *Indian Killer* (1996) は金原瑞人訳で日本語版が読めるし、ヤング・アダルト向け小説の傑作 *The Absolutely True Diary of A Part-Time Indian* (2007) にも日本語訳がある。
- 3 抄訳であるが、原文全文を参照したい場合は、インターネット検索をすると見つかるので、引用した原文の一部を使って検索していただきたい。
- 4 *Reservation Blues* を始めとして現代の大衆文化を大量に取り込んで、固定した政治的立場や被害者としてあるいは過去の静止したコミュニティとしての先住民像に抗うのは Alexie の常套であり、そうして現代の先住民像を示すことが Alexie の創作におけるもっとも重要な主題でもある。
- 5 厚皮類とは象、サイ、カバなど厚い皮をもった哺乳類を指す学名であるが、現在は正式には使われていない。
- 6 原文では各連の間は一行空けになっているが、ここでは行間を詰めて引用する。
- 7 ネイティブ・アメリカンには本国での扱いよりもいいということで軍隊生活を選ぶ人が多いことは、Leslie Marmon Silko の *Ceremony* (1977) などでも扱われるネイティブ・アメリカン文学の重要主題の一つである。
- 8 Shangdu は漢字をあてるならば「商都」となる。中華人民共和国モンゴル自治区に商都と呼ばれる郡があるが、商業化を想起させる文字のイメージを借りただけで、作品は現実とは直接関係がないようだ。
- 9 「アメリカの世界——それは、黒人に真の自我意識をすこしも与えてはくれず、自己をもうひとつの世界（白人世界）の啓示を通してのみ見ることを許してくれる世界である。この二重意識、このたえず自己を他者の目によってみるという感覚、軽蔑と憐びんを楽しみながら傍観者として眺めているもう一つの世界の巻尺で自己の魂をはかっている感覚、このような感覚は、一種特殊なものである。彼はいつでも自己の二重性を感じている。」(デュボイス 15-16) Grassian が “In *The Reservation Blues*, Alexie argues that ethnic hybridity can often be a space of productive creation, but in *Indian Killer*, the same hybridity turns violent and destructive.” (Grassian 104) と述べるように、Alexie は

創作においてこの二重意識の正負両面を深く掘り下げている。

#### Works Cited and Consulted

- Alexie, Sherman. "Biography." *Shaman Alexie*. n.d. Web. March 31, 2018.  
———. *The Reservation Blues*. 1995. Grove Press, 2005.  
Alexie, Sherman, ed. *The Best American Poetry 2015*. Scribner, 2015.  
Doty, Mark, ed. *The Best American Poetry 2012*. Scribner, 2012.  
Duhamel, Denise, ed. *The Best American Poetry 2013*. Scribner, 2013.  
Grassian, Daniel. *Understanding Sherman Alexie*. University of South Carolina Press, 2005.  
Hayes, Terrance, ed. *The Best American Poetry 2014*. Scribner, 2014.  
Hong, Cathy Park. *Translating Mo'um*. Hanging Loose Press, 2002.  
Silko, Leslie Marmon. *Ceremony*. 1977. Penguin, 2006.  
———. *Dance Dance Revolution: Poems*. W.W. Norton, 2007.  
———. *Engine Empire: Poems*. W.W. Norton, 2012.  
デュボイス、W. E. B. 『黒人のたましい』木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳、岩波書店、1992.